

Impact of Early Surgery on Long-term Prognosis in Active Left-Sided
Infective Endocarditis

左心系の感染性心内膜炎に対する早期手術は、予後を改善するか？

神戸市立医療センター中央市民病院 循環器内科

舟越 俊介、加地 修一郎、木村 紀遵、金 基泰、安 珍守、北井 豪

小堀 敦志、江原 夏彦、木下 慎、山室 淳、谷 知子、古川 裕

背景; 感染性心内膜炎に対する外科的手術治療の適切なタイミングは未だに確立されていない。

方法; 1990年から2009年までに当院に入院した左心系の感染性心内膜炎、連続244例を対象とした。早期手術(診断から2週間以内)を90例(早期手術群)に施行、保存的治療を154例(保存治療群)に施行した。保存治療群に対しては、106例が慢性期に手術を施行した。Propensity score解析を使用して、両群間で年齢、性別、基礎心疾患、基礎疾患(腎不全、糖尿病、高血圧)、人工弁感染、病原菌、心不全合併、弁膿瘍、弁穿孔、vegetation サイズ、感染弁位置(僧帽弁、大動脈弁)、脳梗塞合併、Euroscoreにおいてマッチさせ、予後について比較検討を行った。主要心臓関連事象は心臓死、再手術、感染性心内膜炎再発とした。

結果; 平均フォロー期間は5.5年。全244例の1年、5年、10年生存率はそれぞれ86.2%、83.7%、78.8%であった。院内死亡は早期手術群で有意に低値であった(5.6% versus 15.5%, $p=0.019$)。フォロー期間中の心臓死、再手術、再発は早期手術群ではそれぞれ8例、11例、8例、保存治療群ではそれぞれ24例、11例、9例であった。Propensity scoreによりマッチさせた90症例ずつの比較では、7年間の心臓死、主要心臓関連事象回避率は早期手術群で有意に高値であった(心臓死:88.4% versus 80.2%, $p=0.032$ 、主要心臓関連事象:81.3% versus 68.3%, $p=0.013$)。

結論; 従来の保存的治療に比べて、早期手術は左心系感染性心内膜炎患者の長期予後改善に関与していると考えられた。